
ポケットモンスターBW Nafter ~ 限りなく黒に近い白の青年 ~

キラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスターBW N a f t e r 限りなく黒に近い白の青年

【Nコード】

N06790

【作者名】

キラ

【あらすじ】

受験勉強のため、2012年3月まで更新停止中です。主人公に別れを告げ、遠い場所へ旅立った青年、N。伝説のポケモンに乗って彼がたどり着いた場所は、ホウエン地方というところだった。快活な少女や、様々な人物と出会っていく中で、彼は人間として徐々に変化していく。……だが、ホウエン地方ではある組織が暗躍している……？ED後のNが見たいなあと思っていたら自分で書いてしまっていた。そんなN大好き作者による完全自己満小説です。

色々まずい点も出てくると思いますので、勇気のある方だけお読み
ください。一応、ユーザー登録されていない方でも感想を書けるよ
うにしておきます。作者が喜ぶので、気軽にお寄せください。

Nの旅立ち／ここから始まる物語（前書き）

はじめましての方ははじめまして、そうでない方はおはこんばんにちは、キラと申します。今回、どうしてもNへの想いが抑えきれず、無茶してこんな作品始めてしまいました。どうか温かい目で読んでくださるとうれしいです。

Nの旅立ち／ここから始まる物語

すべてのポケモンは、人間から解放されなければならない。

どこまでも歪んでいて、それでいてどこまでも純粋な青年は、かつてそう願った。幼いころから人間と関わったことにより傷ついたポケモン達とばかり接してきた彼にとっては、それは当然のことだった。

だが、旅をし、様々な場所をめぐる中で、彼の気持ちは揺らいでいった。そこには、トレーナーとポケモンが助け合う光景が、数え切れないほどあったから。

そして、彼はひとりの少年と『英雄』として互いに向き合いぶつかった……そして敗れた。

自分は、ポケモンのことしか……いや、ポケモンのことすら理解していなかった。そう感じた青年は、少年の前から姿を消した。

これは、その青年　　Nの、その後の物語である。

「レシラム。この辺で降りてくれないか」

ポケモンリーグを囲むようにしてそびえ立つ城から十分離れた後、Nは自身を背中に乗せてくれているドラゴンポケモン　レシラムに声をかける。その言葉を聞いて、レシラムは減速し、静かに真下の森に降り立った。

「ありがとう、ここまで運んで来てくれて」

Nは地面に着地し、神々しい白の巨大龍を見上げて礼を言う。そして、持っていたモンスターボールを取り出し、手持ちのポケモンをすべてボールから出す。

アバゴーラ、ギギギアル、ゾロアーク、アーケオス、バイバニラ、そして既に出ているレシラム。

彼らすべてに向かって、Nは言葉を発する。

「……皆、ボクの勝手な夢に付き合わせてすまない。もう、ボクから離れても構わないから。お望みとあらば、君達が元いた場所へ連れていこう」

それは、今まで何度も言ってきたことだ。ポケモンをモンスターボールに閉じ込めることを嫌っていた彼は、戦わなければならぬ時だけ辺りの野生のポケモンを捕まえ、戦いを終えればすぐに解放つということをしてきた。

……正直、今はそれが正しいかどうかはわからない。自分の信念は、ついさっき自分とは正反対のポケモントレーナーに破られたところなのだから。

しかし、目の前にいるポケモン達は、自分がその信念を持っていた時に捕まえたのだ。だから、けじめとして、彼らを解放しようとは考えたのである。

ポケモン達はしばらくNを見つめていたが、やがて一匹、また一匹と、森の中へと消えていく。

だが、二匹だけは、いつまでたってもその場から動こうとはしなかった。

「……ゾロアーク、レシラム………いいのかい？ボクと一緒にいても」

Nがそう言うと、ゾロアークは『離れたくない』と言いながら首を

縦に振る。特殊な環境で育ったNは、ポケモンの気持ちを理解することができるのだ。

「……君とは、長い付き合いだからね」

このゾロアークとは、進化前のゾロアのころから親しんでいた。昔のことを思い出し、Nは少し微笑む。

「君も、ボクの旅に付き合ってくれるのか？」

今度はレシラムの方を向き、Nは尋ねる。

無言のまま、首をゆっくり縦に振るレシラム。

そんな二匹をしばし見つめて、Nはフツと笑い、空を見上げる。

「……ありがとう。じゃあ行こうか、新しい世界へ」

ゾロアークをモンスターボールに戻し、再びレシラムの背中に乗るN。

「……ボクはまだ、何も知らない。だから、もっというんな世界を見て、自分が何をすべきか、何をしたいのかを見定めたい」

咆哮をあげながら、レシラムは空高く舞い上がる。行き先は

「行き先は、イツシュ地方の外。どこか遠いところだ」

ここから先、何が待っているのか。それは、Nが持つ予知能力でも見ることができないものだ。

Nの旅立ち／ここから始まる物語（後書き）

というわけで第一話はプロローグ。Nの手持ち整理とかが主でした。やはり最後の6匹が全部いるとホウエンで新しいのをゲットしにくいでしょうし。

あ、ちなみにキーワードのアニメ設定ありというのは、たとえばポケモンセンターは宿泊施設として利用できるとか、そういうアニメならではの設定もまぜているという意味です。バトルの方もアニメよりも……相性とかはちゃんと考えますが。もう1つ補足するとすれば、Nの相方がレシラムなのはそっちの方があつてるとい声が多かったからです。

次回はオリキャラ登場です。この先どうなるか、まさに一寸先は闇状態ですが、これからよろしく願いします！

Nの旅立ち／それは些細な、そして大きな出会い（前書き）

いきなりお気に入り件数が5件！うれしい限りです。

Nの旅立ち／それは些細な、そして大きな出会い

「……さて」

初めて踏み込んだ未知の大地の感触を足で感じながら、Nは小さくつぶやく。

新しい旅立ちから数日。毎日適当な小島を見つけたりなどしてレシラムを休ませながら、Nは大空を飛び続けた。

そして今日、この大きな陸地を発見したのである。

ここを旅してみよう。そう思い、彼は森に降り立ってレシラムをモンスターボールに戻し、現在に至るといっわけである。

「まずは、ポケモン達を休ませないと」

降りる前に上空から辺りの様子を観察したところ、近くにポケモンセンターがあるのを発見していたので、Nはその方角に向かって歩き始める。

木々が生え渡る森の道を一步一步進み、やがて右手に結構大きな川が現れる。そんな当たり前のような風景ではあるが、Nはそれによって改めて『始まり』を感じる。

…… 未知の場所。何をするとともに決めていない、未知の旅。

「……だが、不確定要素だらけなのもいいかもしれない」

イッシュ地方と比べて少し青が濃い空に向かって、彼はそう言い

「た、助けて〜〜!!」

「チャモ、チャモ〜〜!!」

その彼の言葉は、突如耳に入ってきた二つの叫び声によって

かき消された。

「あれは……！」

声のした方　川を見ると、上流の方から流されてくる鳥のヒナの
ようなオレンジ色のポケモンの姿が目に入った。

「っ！」

川幅は広いが、幸いそのポケモンはこちら岸のすぐそばを流されて
いる。素早くうつ伏せになって目一杯手を伸ばすと、ぎりぎりなが
らもポケモンの体を掴むことができた。

「大丈夫かい？」

そのままそのヒナポケモンを岸へと引き上げ、優しく声をかけるN。
心底安心したという表情だ。

「見た感じ、ほのおタイプかな。なら水は厳しかったろう。今ポケ
モンセンターに連れて行って」

「……って、あたしも助けてよ〜〜!!」

そんな折、怒ったような必死の叫びが聞こえてくる。

「……………あ」

そういえば、最初叫び声は二種類聞こえてきたのだった。片方は今助けたポケモンのもの。もうひとつは、今川の真ん中の方を流れている少女のもの。

「君のパートナー？」

目の前のポケモンに問いかけると、彼女？（見知らぬポケモンなので性別がわからない）はこくりこくりと焦ったようにうなずく。少女を心配しているようだ。

そんな様子を見て、Nはモンスターボールを取り出し、中にいるポケモンを呼び出す。

「ゾロアーク、あそこの少女をここまで運んで来てほしい」

Nの指示に小さくうなずくと、ゾロアークは水面から飛び出している岩から岩へ身軽に飛び移っていく。

「も、もつだめ……ぶくぶく……」

そして、間一髪沈みかけていた少女を川から引き上げたのだった。

「へくちっ……あ、ありがとう。アチャモとあたしを助けてくれて」

くしゃみをして体を震わせながら、アチャモを受け取った少女はNにお礼を言う。水に落ちた寒さを感じながらも、その顔は笑っている。

「礼はいらないが…なぜあんなことになっていたんだ？」

Nが尋ねると、少女はテへへと頭をかきながら答える。

「いやあ、ちょっと目を離してた間に、アチャモがすっかり川に落ちちゃって……急いで助けようとしたら、あたしも一緒におぼれちゃった」

「……なるほど」

「それしても、無事でよかったねアチャモ！すぐにトウカシティのポケモンセンターに連れて行ってあげるからね！」

「チャモチャモ」

アチャモをぎゅっと抱きしめる少女。アチャモの方もうれしそうだ。そんな光景を見て、Nもつられて少し顔が緩む。

「君は、そのアチャモが大好きなんだね」

「もちろん！」

Nの言葉に、彼女は大きくうなづく。

「アチャモも、君のことが好きだと言っているよ」

「言っているよって……ポケモンの言葉がわかるような言い方だね」

「ようなどではなくて、ボクには本当にポケモンが何を言っているかわかるんだ」

「あはは、うっそだー！」

そんなことはあり得ないというように笑う少女。まあ、普通は信じられないだろう。

「信じる信じないは君の自由さ」

なので、とりあえずそれだけ言っておいた。

「って、そういえばまだ名前言ってなかったよね。あたし、ソラっていうんだ。あなたは？」

思い出したように自己紹介を始める、ソラという少女。年齢は12くらいで、黒髪を二つくりりにしている。くりつとした大きな目が特徴か。

「ボクはNだ」

「N？それってあだ名か何かだよ。本名は？」

何も知らない少女は、Nにそう聞いてくる。

「……Nが本名だよ。それ以外の名を与えられたことはない」

「え……………？」

「世の中にはいろんな人間がいる…つまりはそういうことね」

「……………」

Nの明らかに何か普通でない面を垣間見たソラは、しばらく黙りに
んでいた。

「……………ここでモンスターボールを渡せば、ポケモン達を休ませてく
れるんですよね?」

「そうですね。ポケモンセンターの利用は初めてかしら？わからないことがあったら何でも相談してね」

ポケモンセンターに到着したNは、現在その職員 通称『ジョーイさん』と会話をしている。まともにここを使うのは初めてなのだ。

「では、ひとつ頼みがあるのですが……このボールに入っているポケモンのことは、誰にも言わないでください」

レシラムの存在を、あまり多くの者に知られるのは好ましくないと考え、Nはそう言った。ジョーイさんも、彼の真面目な表情を見て察してくれたのか、すぐにうなずいて、

「わかりました」

と言ってくれた。

「それともうひとつ。この地方全体の地図はありませんか」

「ああ、タウンマップならあそこにあるから、自由に持ち帰っていいですよ」

向こうを指差しながら、ジョーイさんはそう答えた。

「あっ！タウンマップもらってきたんだ。あたしも持ってるよ、それ」

タウンマップを手に取ったNがそこらへんの椅子に座ると、どこからともなくソラがひょっこり現れた。とりあえず一緒にポケモンセンターに来た後は、別れて動いていたはずなのだが。

「……ここはトウカシティ、だったね」

「うん」

タウンマップを眺めて、トウカシティの文字を発見したNは、そこからこの『ホウエン地方』という場所全体を見ていく。

広さとしては、イッシュ地方とさほど変わりないようだ。

「あたしのも見てみる？いろいろ書きこんでるんだけど」

そう言って、ソラは自分のタウンマップを取りだし、広げる。見ると、確かにいろんなところにいるんな書きこみがあった。

その中で、8つの場所についている赤印が目がとまる。

「11の印は？」

「ああ、それはポケモンジムだよ。バッジを8つ集めて、ポケモンリーグに行くことがあたしの目標なんだ!…と言っても、まだゼロだけだね」

恥ずかしそうに言いながらも、そう答えるソラの目は輝いている。

「……そうか。いずれはチャンピオンを倒すのが夢なのか？」

「そ。…でも、その前にリーグを勝ち上がらないと」

「リーグを勝ち上がる？」

ソラの言葉に疑問を抱くN。イツシュのポケモンリーグではそんなことをする必要はなかったはずだが……

「あれ、知らないの？ホウエンリーグはね、まずバッジを8つ集めた人たちがリーグで戦って、優勝した人が四天王とチャンピオンに挑むんだよ」

「そうなのか……」

それからも、Nとソラの会話は続いていった。Nはどこから来たのかだとか、そういうえげつないぶん早口だねだとか、とにかくソラが次々話題を振ってきた。

「（……よく話す子だ）」

もう日も暮れて大分時間が経った中、あくびをしながらNはそう感じるのだった。

Nの旅立ち／それは些細な、そして大きな出会い（後書き）

というわけでオリキャラのソラが登場です。黒髪ツインテールという外見で、性格は活発。大体こんな感じですよ。次回以降、キャラを少しずつ掘り下げていくつもりです。

感想・評価などあれば、どうぞ気軽に寄せてください。

では、また次回。

Sの悩みごとノポケモンとトレーナー（前書き）

今ブラックでWIFIランダム対戦^{シングル}やってます。現在27勝13敗（切断されたのが5。多いですね…）。使用ポケモンがなかなかガチなので、まあこのくらいの数字は妥当でしょうか。ちなみに、ラプラス・オノノクス・ペンドラー・レントラー・ウインディ・ニドキングを使っています。まあ、見ての通り未完成です。なぜならこのパーティー地面に弱すぎるから。

Sの悩みごと／ポケモンとトレーナー

「お預かりしたポケモンは、元気になりましたよ」

「ありがとうございます！」

翌朝、ジョーイさんからモンスターボールを受け取り、ソラは小さくお辞儀をする。ジョーイさんもふふ、と笑い、

「またいつでもご利用くださいね」

と言って、ポケモンセンターの出口へ向かう彼女に手を振ってくれた。

「……それにしても、なんか気になるなあ」

手持ちはまだアチャモ一匹だけなので、当然返してもらったモンスターボールも一個。それをバッグにしまいながら、ソラは昨日会った青年について考える。

特に目的もなくホウエン地方を旅するつもりらしい彼からは、何となく不思議な雰囲気を感じられる。早口の話し方もそうだし、何よ

り印象深いのは眼つきだ。

「やっぱり…何かわけありなのかな」

失礼だと思ってNには言わなかったが、ソラは彼の眼つきが変
言つなれば『死んでいる』ことに気づいていた。昨日の彼の意味
深な言葉から考えて、人には言えないような特別な事情があるのか
もしれないと考える。

本当に、不思議な青年だ。

「……って、あたし今他人のこと考えてる余裕ないんだった」

川で溺れる前に起きた出来事を思い出し、ソラは少し落ち込む。

『まったく、弱いね君は』

その時ある少年に言われた一言を思い出す。

「うう、思いだすとよけいに元気無くなってきた。ここは大好きなピーナッツバターでも食べて」

年頃の女の子らしく(?) (食べ物で気を紛らそうと思いを巡らせながら外に出たとき。

「…あれ？」

ポケモンセンターの外でモンスターボールに顔を近づけているあの青年は……

「おい、N〜！」

声をかけながら駆け寄ると、Nはゆっくりとこちらに顔を向ける。ほぼ無表情と言ったところか。

「……君か」

「これからどこに行くの？」

ソラが尋ねると、Nは少しの間顔に手を当てて目を閉じる。しばらくしてから、まだ決めていなかったらしい。

「……とりあえず、今日はここトウカシティを見て回るつもりだ。それからカナズミシティの方へ向かう」

その答えを聞いて、ソラはポン、と手を叩く。

「だったらあたしがこの街を案内してあげる。昨日もここにいたし、道は結構覚えてるよ」

「……ボクとしてはどちらでも構わないが。君はそれでいいのか？」

「もちコース！さあ出発だ〜！」

すぐさまNの手をつかみ、ソラはぐいぐい彼を引っ張り歩いて行く。

「……朝から元気だな、君は」

Nの半ば呆れたようなつぶやきが聞こえたが、気にしない気にしない。

彼を誘った理由は二つ。少しふさぎ気味の気分を晴らすことと、もうひとつは、やはり彼について何かが気になるからであった。

「こっちはお花屋さん。きれいでしょ？」

「……そうなのかな？ボクにはよくわからない」

「えっ！？きれいに決まってるよ！見てよ、この花なんて花びらの色の濃さとか葉っぱの形とかまさに完璧じゃん！」

「……………??」

「ジョーイさんに聞いたんだけど、ここのソフトクリームおいしいらしいよ。一緒に食べよ！」

「ソフトクリームか。ボクもあの食べ物好きだ。牛乳をはじめとした様々な材料から作られたクリームをソフトクリームフリーザーと呼ばれる専用の機械に直接投入し機械の中で高速攪拌しながら冷凍させて原料の中に空気を注入させていき一定の軟らかさが得られたところで原料を機械から取り出しあのとぐるを巻いた形でコーンの上に乗せるという発想をした人間は尊敬に値するね。ボクはその中でもやはり牛乳が気に入っていて」

「ちょ、ちょ、ちょっ！そんな早口で言われたら何言ってるか全然

わかんないよ！早口じゃなくてもわかる気しないけど！」

「ここのお店でピーナッツバター買っていいのかな。大好物なんだ」

「ピーナッツバターか。あれはピーナッツを」

「ストップストップ！もうこれ以上語らなくていいから！」

そんな感じで街を色々観光した後、ソラとNは

「…それで、ここがポケモンジム。ジムリーダーはノーマルタイプの使い手」

「そうか。ボクはジムバッジには興味はないが、君はこれから挑戦するの？」

何の気なしに聞いてくるN。それに対し、ソラは先ほどまでの元気はどこへやら、少し顔をうつむかせる。

「……うん、昨日バトルを申し込んだんだけど、あっさり負けちゃった。……全然勝てる気がしなかったなあ」

はあ、とため息がこぼれる。とはいえ、さすがにジムリーダーに簡単に勝てるとはもともと思っていたので、それだけではここまで沈まない。

「……しかもその後、あたしよりちょっと年下の男の子とバトルしたら、これまたあっさり負けちゃって。トレーナーとしての才能がないってまで言われちゃった」

ミシロタウンでオダマキ博士からアチャモをもらって始まった、期待に満ちた旅。

だけでももちろん、不安がないわけではなかった。うまくやっていくのかどうか。

その気持ち、今どんどんふくらんでしまっている状態だ。

「あたし、ダメな奴なのかな……」

「……………」

Nは黙ってソラの言葉を聞いている。

「あれ？君は昨日の弱いトレーナーさんかな？」

「っ！？」

そんなとき、ソラにいきなり声をかけて歩いてくる少年の姿が。

「……………彼のことが」

「ひひ……………」

Nの言葉にうつなずくソラ。

「ひょっとしてジムに挑戦するの？無理だと思っけどな」

その少年は、今話に出たばかりのポケモントレーナーだった。

Sの悩みごと／ポケモンとトレーナー（後書き）

ちなみに僕の初ポケモンはサファイアです。小3くらいにやって、
ちゃっかりはまりました。確か、ほのおのジムで苦戦した記憶が……

今回はいよいよポケモンバトルです。うまく書けるかな……

では、また次回。

Sの悩みごと／あなたの名前

「そちらの方はお友達かな？はじめまして、僕はジョンと言います。昨日、そちらのソラさんとバトルしたんですよ」

ジョンと名乗った少年は、Nの方を見て意地の悪そうな笑みを浮かべる。見てはつきりわかるような高そうな服を着て、髪は金色。金持ちの家のおぼっちゃんと言ったところか。

「それはさっき聞いたよ。君が勝ったんだろう」

「その通り。まさに圧倒的でしたね。ソラさんの弱いことと言ったらそれはもう……」

「……………」

いつもなら、ここまで馬鹿にされれば普通は言い返す。

だけど、自信がない。ソラはただ、黙ってうつむいていることしかできない。

「まったく、あれでは使われているアチャモもかわいそうですね。」

きつとさぞ不満でしょうよ」

「っー」

びくつと体が震える。一番怖れていることを言われてしまった。昨日Nはああ言ってくれたけど、やっぱりアチャモは自分と一緒にいない方が……

「それは、君にわかるようなことじゃないだろうっ？」

え、とソラは少し驚いてNの方を見る。今彼が発した声が、初めて聞くような強い調子のもだったからだ。

「おやおや、友達をかばうんですか？でも事実ですよ。なんなら、今からもう一度バトルしましょうか？」

ジヨンはそれを友達が怒ってソラをかばっただけと感じているようだが、それは多分間違いだ。Nとは昨日会ったばかりで、今日だって朝偶然会わなければ一緒に行動することもなかったくらいの関係なのだから。

「どうするんだ、ソラ。バトルを申し込まれたようだけど？」

Nが言葉をかけてくる。 そうだ、バトルを挑まれたんだ。

「……で、でも」

なかなか首を縦に振ることができないソラ。そんな様子を見て、Nは真剣な声を出す。

「君はアチャモが大好きだと言ったね。そしてボクの言った通り、アチャモも君のことを大好きだと思っている。そんな君達の間係を、ああも馬鹿にされているのか」

「っ、それは……」

嫌だ。そう思い、ソラは半ば泣きそうな表情でNの顔を見つめる。

「ポケモンとトレーナーにとって一番大事なものは、互いが互いを信じる心 絆。もちろん、それとトレーナーとしての強さが完全にイコールだとは言いきれないが……ポケモンを愛し、ポケモンに愛される、とても強いトレーナーをボクは知っている」

「互いが互いを、信じる……………」

「君の実力がどれほどのものなのか、もちろんボクは知らない。だが…………もっと自信を持ってぶつかってみてもいいんじゃないか？」

それは、今まで通り早口で、どことなくぶっきらぼうなものを持つ言葉だった。

だが、その言葉はソラの心に大きく響く。

「…………そうだよね、落ち込んだままなんて、ダメだよね」

両手をぐっと握り、ソラは真っすぐジョンの方を見て、高らかに宣言した。

「その勝負、受けるよ！」

「使用ポケモンは一体。これでいいね？」

「うん」

場所を大きな広場に移し、ソラとジヨンは互いに向かい合う。そこから少し離れたところで、Nは審判兼観客として立っている。ソラはやる気満々、対してジヨンは余裕たっぷりといった態度である。

「じゃあ始めるよ。行け、ジグザグマ！」

「グマー！」

「行くよ、アチャモ！」

「チャモ！」

ジヨンはジグザグマ、ソラはアチャモをそれぞれモンスターボール

から繰り出す。

「折角だから、またジグザグマで相手してあげるよ」

意地悪く笑いながらジョンが言う。昨日と同じポケモンで倒して、こちらの気を完全に削ぐつもりだろうか。

「今度は負けないよ！アチャモ、ひのこよ！」

先手必勝、そう考えたソラは、アチャモに勢いよく攻撃を指示する。

「ジグザグマ、かわしてたいあたりだ」

ジョンは余裕の表情を崩さず、ジグザグマに命令を出す。言われたとおり軽い身のこなしでひのこを避けたジグザグマは、攻撃のタイムラグで動きが止まっているアチャモに勢いよくぶつかる。

「チャモー！」

「アチャモ！大丈夫！？」

ソラの呼びかけに応じて立ちあがるアチャモだが、もろにたいあたりを喰らってしまったその体はふらついている。

「いきなり技を出してあたると思っているのかい？僕のジグザグマが素早いことは昨日わかっていたはずだろう」

「うっ……」

ジョンの言うとおり、前回のバトルでもアチャモの攻撃は全く当たらず、たいあたり二発を受けてあっさり負けてしまった。だからこそ、油断していそうな初っ端に攻めれば…と思ったのだが、そううまくはいかないようだ。

「今度は僕から行こう。ジグザグマ、アチャモをかく乱しながらずつきだ！」

「グマー！」

「アチャモ、かわし」

勢いよく突っ込んでくるジグザグマを見て、ソラはアチャモに指示を出そうとするが、その声は途中で止まってしまふ。

ジグザグマはアチャモに真っすぐぶつかろうとせず、周りをぐるぐる回り始めたのだ。

「え、え？は、速い……」

その動きについていけず、ソラは困惑する。むろん、アチャモも同様だ。

「今だ」

そして、ジョンの声とともに、ジグザグマのずつきが決まる。またも回避できずまともに攻撃を受けてしまったアチャモは大きく吹き飛ばされる。

「アチャモ！」

「チャ、チャモ……」

立ちあがるアチャモだが、もうそれだけで精一杯といった様子だ。

「へえ……昨日よりはタフだね。だけど、次で終わりだよ。ジグザ

グマ、とどめのたいあたりだ」

「（やっぱり、ダメなの……？）」

ほぼ負けが確実になったところで、ソラの頭に負の感情が立ちこめる。やる気を出してリベンジを挑んだが、結局勝てないのか

「っ……！」

だが、そのとき彼女は見た。

当の戦っているアチャモの目は、まったくあきらめていないことを。

『一番大事なものは、互いが互いを信じる心』

絆』

「（そうだ、アチャモがあきらめてないんだから、あたしが信じなくてどうするのよ！）アチャモ、すなかけ！」

迷いを振り切り、声を張り上げるソラに伝えて、アチャモは今まさに襲いかからんとするジグザグマの顔めがけて砂をかける。

「何っ!?!」

もう動けるとは思っていなかったのか、油断していたジョンは目を大きく開く。

「グマツ!?!」

砂によって視界が遮られ、ジグザグマは思わず動きを止める。

「今よアチャモ、ひのこ!」

「チャモ!」

すかさずひのこを出すアチャモ。今度は相手の隙をついたため、見事ヒットする。

「くっ……うろたえるなジグザグマ!ずつきだ!」

反撃しようとして突っ込んでくるジグザグマだが、砂をかけられたせいでまったく見当違いの方向へずつきをしてしまう。

「アチャモ、まだいけるよ！どんどんひのこ！」

ここぞとばかりに力を込めて火を噴きだすアチャモ。ジグザグマは確実に体力を削られていく。

「この…調子に乗るな！ジグザグマ、何でもいいから攻撃を当てる
！！」

いら立つジヨンの声を聞いて、ようやく視界が戻ってきたジグザグマは再び素早い動きでアチャモにたいあたりをする。

……だが。

「な……………」

今までなら吹き飛んでいたはずのアチャモが少しのけぞっただけなのを見て、ジヨンは呆気にとられる。

「まさか、やけど……………！？」

「たいあたりよ、アチャモ！」

攻撃力が大きく落ちるやけど状態になってしまったのかという考えが頭をよぎったが、もう遅い。指示を受けたアチャモの攻撃は、すでにジグザグマを捉えていた。

「グマーー!!！」

吹き飛ばされ、地面に叩きつけられたジグザグマに、動く気配はない。

「…………ジグザグマ、戦闘不能。よって、勝者はソラ」

それを見て、今まで黙ってバトルを眺めていたNが、試合の終わりを告げた。

「あ、あたしの勝ち…………？」

バトルに夢中になっていたソラは一瞬呆けたが。

「やっつた~~~~!!！」

やがて、勝利の喜びを爆発させた。

「くそっ！この役立たず！弱いポケモンは僕には必要ないんだよ！」

だが、そんな中聞こえてきたジョンの声によって、ソラは思わずそちらを見る。

「もういい、こうなったら何が何でも倒してやる！行け、コドラ！」

「コドラアー！！」

怒り狂った表情でジグザグマを蹴り、ジョンはモンスターボールからコドラを呼び出す。

ひどい、と言おうとしたソラだが、隣に立っているNが拳をものすごい勢いで握りしめているのに気圧され、声が出ない。

「さあコドラ！アチャモにアイアンテールだ！」

「ちょ、ちょっと待ってよ！バトルは1対1のはずでしょ！？」

「もうそんなの関係あるか！この役立たずのせいでとんだ大恥だ！」

完全にキレてしまっているジヨン。とはいえ、コドラのような強そうなポケモンに対して、もうぼろぼろのアチャモでは相手にならない。

「ど、どうしよう……」

ソラがあたふたと焦っているとき。

「なら、ボクが相手になろう」

Nが、コドラの前に進み出た。彼の放つ殺気のようなものに、ソラは身震いする。

「頼むよ、ゾロアーク。……コドラ、ごめん。今から君を少し傷つけることになる」

モンスターボールから出てきたのは、昨日ソラを助けてくれた黒い

ポケモン。

「ゾロアーク……あくタイプのポケモンか……」

ポケモン図鑑を見て、ソラはそうつぶやく。確かに、外見的にはぴったりだ。

「ふん！コドラ、アイアンテールだ！」

ジョンに命令されたコドラが、ゾロアークめがけて走ってくる。あの巨体から繰り出される攻撃を受けたら、おそらく大ダメージだ。

「危ない！」

ソラが叫んだが、彼女の心配は杞憂に終わる。

次の瞬間。

「何っ……！？」

ゾロアークの姿が、消えた。コドラのアイアンテールは、空しく空

を切る。

「きあいだま」

Nがそう言った瞬間、ゾロアークがコドラの背後に現れた。ジグザグマとは比べ物にもならない高速移動でまるで見えないような状態になっていたのだ。

「ドラア!?!」

きあいだまが命中し、一撃でコドラは倒れる。それを見て、ジヨンはうろたえる。

「…ま、まだだ、まだ僕の手持ちは四体いる！パパからもらった強いポケモンが！」

その後、ジヨンはさらにポケモン達を繰り出した。

だが、バトルの内容は描写するまでもないだろう。

「そ、そんな……………」

「すごい…………こんなに強かったんだ」

ジヨンの手持ちはすべて倒れ、試合終了。圧倒的なその強さに、ジヨンもソラも開いた口がふさがらない。

「ありがとう、ゾロアーク。ゆっくり休んでくれ」

お礼を言いながらゾロアークをモンスターボールに戻すと、Nは地べたにへたりこんでいるジヨンを凍てつくような視線でにらみつける。

「ポケモンは、君の道具じゃない。ああいう行為を続けるようなら…………ボクは許さない」

その、人を殺せそうな雰囲気、ジヨンは顔を歪め

「す、すみませんでした〜!!」

そう言って猛ダッシュでこの場を去っていった。

「……………」

Nは小さく息をつくとき、ソラの方を振り向く。

「……………言い忘れていたけれど、未熟ながらもなかなかいいバトルだったよ」

「えっ？あ、ありがとう」

いきなり褒められて戸惑うソラだが、バトルに勝ったことを思い出したのか、徐々に笑顔になっていく。

「あなたのおかげだね」

「ボクは別に何も……………」

「イーからイーから。本当にありがとう」

Nの言葉を遮り、ソラはぺこりと頭を下げる。

やがて頭をあげると、彼女は再び口を開く。

「ねえ、あたしもあなたの旅について行っていい？行き先も同じみたいだし」

「……なぜボクと？」

「だって、色々学べそうだし、それに…あなたと一緒に行けば、楽しそうだから！」

「…よくわからないが、別に構わないよ」

断る理由もないので、Nはソラの申し出を受ける。

「やったー！じゃあさ、もうひとつお願いしてもいい？」

「内容によるな」

Nがそう答えると、ソラは少し間を開けて、それから口を開く。

「あなたのこと、あたしが考えた名前と呼んでいい？なんだか、N
って呼ぶんじゃ気持ちが入らないというか……」

「……そんなことか。なんと呼ばれようが、気にはしないが」

「んじゃ……『ナオト』でいいかな？」

提案された名前は、別段変なものでもない。問題ないだろうと考え、
Nはうなずいた。

「ありがとう！……そっか、あたし昨日からこれを言いたかったんだ
！胸がすっきりした〜」

うんうんとうなずくソラ。他人の名前をそこまで気にするといつこ
とは、彼には理解できなかったが。

「じゃあ改めて、これからよろしくね、ナオト！」

そう言ったときの彼女の笑顔は、なぜか忘れられなかった。

Sの悩みごと／あなたの名前（後書き）

ソラ…特性 てんのめぐみ

これは設定にしておきます（おい でもまあ、この強運もポケモンを信じてあきめないからこそ起きるものであることは間違いないわけです。

ついでにアチャモはすなかけ覚えるの19レベルで、もうワカシャモに進化するレベルに到達してることになるのですが、まあこの辺はアニメ寄りということで大目に見て置いてください。だってもう『かわせ』使っちゃってるし……

というわけでNの名前が決定。なんで募集しなかったかというところ、展開上12歳の少女が考えることになったので、多分皆さんが考えているレベルの高い名前は思いつかないんじゃないかな、と思ったからです。日本人っぽい名前なのもそれが原因です。

ナオトとは、まあ感じに直せば直人、つまり素直な人ってことです。対してソラは、Nを磁石のN極と見立て、引きあうS極のSがイニシャルになるようにつけたというのと、空は自由の象徴だからですね。安直ですけど。

ところで相談なんですけど、今後地の文ではNと呼ぶかナオトと呼ぶか悩んでいます。どっちがいいでしょうか？

プロローグも終了。では、また次回。

オリキャラ設定・ソラ（前書き）

試験があつて更新できませんでした、申し訳ありません。結果？まだわからないけど、数学がヤバいです……

オリキャラ設定・ソラ

作者「というわけで、プロローグも終わり、いよいよ旅が始まるというところで、今回はオリジナルキャラであるソラの紹介です。てことで本人呼んできました」

ソラ「やっほー！こんにちは、ソラです！こんな駄作を読んでくれる心やさしい読者のみなさん、ありがとございませう」

作者「いきなりぐさつと来るセリフを言いやがった……」

ソラ「だって本当のことだもん。あたしだって登場するならもって文章がうまい作者さんの作品がいいよ」

作者「いやまあそうだろうけど……っと、話が逸れた。気を取り直して、まずはソラのプロフィールの紹介をします」

ソラ「え〜と、身長は……何センチだったっけ？確か140から160の間だったと思うんだけど……」

作者「本人に言わせると終わりそうもないので、ちやっちやと書いていませう」

名前：ソラ

年齢：12

出身地：ミシロタウン

身長：151cm

体重：41kg

髪の色：黒

髪型：ツインテール

好きな食べ物：ピーナッツバター

嫌いな食べ物：苦いもの全般

所持ポケモン：アチャモのみ

スリーサイズ：上から

ソラ「ってちょっと待って！それ以上は言っちゃダメ〜！！」

作者「まだ12歳なのに何を恥ずかしているんだ。ミシロタウンの同年の女子の中で胸が一番小さくたってまだまだこれからだぞ」

ソラ「それはわかってるけど、うちのお母さんも小さいから、正直自信がないの……」

作者「まあ貧乳も需要あるから気にしないでいいと思うよ。では次、出身地について」

ソラ「ミシロタウンと言えば、やっぱりオダマキ博士のポケモン研究所かなあ。いろんなことやってみて、あたしも旅に出る前はそこでポケモン達と遊ばせてもらってたんだ」

作者「その時にアチャモと出会ったのか？」

ソラ「そうなの。それで、今は一緒に旅するパートナーってワケ！」

作者「なるほど、仲がいいということとで、これならNも納得だろうな」

ソラ「え？何のこと？」

作者「何でもない。君が知るのはもっと先のことだ」

ソラ「……??」

作者「次は身長と体重だが……平均的だな」

ソラ「そうだね。あんまり話すこともないかな」

作者「ちなみに12歳女子の平均身長と体重をわざわざ調べたのは秘密」

ソラ「そんなことしてたの……」

作者「次行ってみよー。好きな食べ物についてだが……ピーナッツバター？これ単体だとおかずにならないんだけど」

ソラ「なるよ！ピーナッツバターだけでご飯三杯はいけるよ！ついでに髪型ツインテールと組み合わせると元気百倍だ〜！！」

作者「あれ、ツインテールでピーナッツバター好きってどっかのエロゲにいたような……まあいいか」

ソラ「何ぶつぶつ言ってるの？」

作者「いや、何でも。じゃあ、次は作者が描いた君のイラスト（色塗ってないけど）を載せよう。だがここで警告！読者のみなさん、めっちゃ下手なんで覚悟しといてください」

ソラ「え？え？どんな絵になってるの？というか下手なのになんで載せようと思ったの!？」

作者「勉強の合間に落書きしてたんだ。では、見たい方だけどうぞ」

> i 1 2 5 2 6 | 1 7 6 0 <

ソラ「うわあ……こんな下手に書かれたくないよ……」

作者「すまない。でもこれでもかなり頑張ったんだ。実は俺、『ドラえもんくまともに描ける限界くドラミちゃん』なレベルなんだよ」

ソラ「だったら載せないでよう……あう〜」

作者「ソラが落ち込んだので、今回はここまでです。まだ始まったばかりの作品ですが、これからもどうぞよろしくお願いします!」

ソラ「お願いします……」

オリキャラ設定・ソラ（後書き）

挿絵を見た方、お目汚し失礼しました。消し残りとかもあってひどい出来ですが、でも気持ちだけは込めました。試験勉強がおろそかになった気がするけど……

Hからの来訪者／足りないものって？（前書き）

Nの声優は石田彰さんだっという意見をよく聞きますが、緒方恵美
さんで再生される僕は異端なんでしょうか？（エヴァンゲリオンの
碇シンジとか、カードキャプターさくらのユエ、Angel Be
ats!の直井くんとかです）

Hからの来訪者／足りないものって？

太陽が東から顔をのぞかせる中、ポケモンセンターの外に立っている人物が2人。

「え〜と……食べ物はお互い半分づつ持ってるよね？」

「ああ、確認したよ」

「他に忘れ物はない？」

「心配ない」

先ほどから続くソラのしつこいくらいの確認にきちんと答えるN。

度重なる質問の後、ソラはようやく気が済んだようだ。街の外へつながらる道の方に体を向け、勢いよく右手を天に突き上げる。

「それじゃ、しゅっぱーっ！ーっ！ー！」

真っ白な少年と、無邪気な少女。

2人の旅が、始まった。

「って、うわあ〜！〜！〜！？ピーナッツバター忘れてきた〜！取ってくる〜！」

「……あれほど人に確認しておいて、自分が忘れているのか」

…多少先が思いやられるが、それでもいいとNは感じる。もともとあてもない旅だ、ゆっくり進めばいい。

「というわけで、目指すはトウカの森だね。今日中に森の入口あたりに行ければいいんだけど……」

トウカシティを出たNとソラは、軽く会話をしながら足を進めている。旅の基本は、当然『歩く』ことだ。

「しかし、本当にトウカジムには再挑戦しなくてよかったのか？」

「うん。今は手持ちがアチャモしかいないしね。もっと強くなつてからリベンジだよ。ナオトの方こそ挑戦しなくてよかったの？あんなに強いんだから絶対勝てると思うけどなあ」

Nの質問に答えた後、逆に聞き返してくるソラ。それに対し、Nは視線を彼女から外して口を開く。

「……今のところはバッジを集めることに興味はないからね」

イッシュ地方のジムバッジを集めたのは、それが己の夢につながっていたからだ。

……だが、今の彼には夢と呼べるようなものは存在しない。

「ふん、そっか」

一方、確たる夢を持つ少女は、Nの言葉の深い意味などは考えなかったように、そう返事をしただけだった。

それから数時間後。

「うう、お腹減ったね。ナオト、そろそろお昼にしない？」

腹の虫をぐーぐー鳴らしながらソラが提案する。彼女の言うとおり、時間的にもお昼時だ。

砂利道のすぐ横できれいな小川が流れており、料理をするぶんにも問題はない。

「ではそうしようか。ボクが何か作ろう」

「え？ナオトって料理できるの？」

「多少は。とは言っても、こんな場所では簡単なものしか作れないが」

幼いころから、Nは父・ゲーチスから英才教育を施されてきた。その中には、将来旅をするために必要な技術 料理も入っていたということだ。

それを聞いて、ソラは心底うれしそうな顔になる。

「やった！あたし料理へたくそだからさ、いつつも料理をそのまま買ってたんだよね。無駄遣いがなくなつてよかつた」

ということは、彼女の持っている食料はすべて加熱するだけで食べられるとか、そういうものばかりなのだろう。それらはもしもの時に取っておこうと考え、Nはリュックから鍋などを取りだし、食材の調理を始めた。

「
完成だ」

出来上がったのは、野菜や肉が入ったスープ。ポケモン達には、彼らの食材を軽く調理したものを用意した。

「おお〜！すごいすごい、いただきまーす！」

空腹のソラはスープを見て興奮しているのか、手を合わせるやいなや料理にがつつき始めた。そこには女性らしさというものはかけらも感じられない。

Nも感想が気になるのか、彼女の様子をうかがう。

やがてスプーンの動きを止めたソラは顔をあげ、Nを見つめる。

「おいしい！……でも、何か足りないかも……」

「何か？それは一体？」

彼女のあいまいな言葉を聞き、Nも自身の口にスープを入れる。

だが、特に足りないものがあるとは感じられない。簡単な料理だ、ミスもした覚えがない。

「何だろう……でも、お母さんの料理と比べるとどこかが……うーん」

「それは、単に君が母親の料理を好んでいるだけではないのかい？」

「いや、そついうのじゃなくてね………なんかこつ………」

うんうんうなるソラだが、要領を得た回答は出そうにもない。この件に関しては置いておいて、冷めないうちにスープを飲んでしまおうとNが視線を動かしたとき。

「おや………?」

視界に映ったものに対して声をあげるN。ソラがそれにつられてそつちを振り向くと。

彼女のリュックが一匹の鳥ポケモンによって漁られていた。

「ええええ!?! ちょっと、なんでナオトはそんなに反応が薄いのか?!
? 一大事だよ 一大事!」

事態を呑み込んだソラのNへの大声のツツコミに驚いたのか、その

鳥ポケモンは羽を広げ、空中に飛び上がる。その脚には小さなビンが挿まれている。

「あ〜！？それあたしのピーナッツバター！あのポケモン何て言うの？」

焦りながらポケットから赤い機械を取りだして、画面を開くソラ。その機械に、Nは見覚えがあった。

「それは、ポケモン図鑑かな」

彼のよく知る少年も、同じような形のものを所有していたのだ。

Nの問いにうんうんとうなずきながら、ソラは図鑑に出た文章を読み上げる。

「なになに……スバメ、こツバメポケモン。ノーマルタイプとひこうタイプか……」

名前がわかったところで、彼女はスバメの方を真っすぐ見る。

「スバメ、それはあたしの大好物のピーナッツバターなの。だから

返してくれないかな？……」

「……………」

しばし、互いに硬直。

その後、スバメはさらに高く飛び上がり、

「スバツ！」

舌を出して羽を器用に使い、あっかんべーをして飛び去っていく。

「かつちーん！！待ちなさーい！！絶対ピーナツバターは返してもらっわよ〜！！！！」

そんなスバメの態度にキレてしまったソラは、猛ダッシュでスバメの後を追っていく。

「あ、ちょっと……………」

結果、状況を眺めていたNはその場に取り残されてしまった。

「……まあ、放っておけばそのうち帰ってくるだろう」

そう思い、Nはモンスターボールからゾロアークを出して、今しがた作った料理を食べさせる。本当はレシラムにも食べさせてあげたいところだが、やはり目立ちすぎてしまうのが懸念される。

「さて、ボクもスープの残りを」

「珍しいポケモンだね。他の地方から来たのかな？」

その時、突然Nに声がかげられた。顔をあげると、そこには特徴的な青い服に身を包んだ女性がゾロアークを眺めている姿が見えた。

「あなたは？」

Nが尋ねると、その女性は彼の方に向き直って、こう名乗った。

「私はナギ。ヒワマキシティってところでジムリーダーをやっているんだけど……」

Hからの来訪者／足りないものって？（後書き）

というわけでまさかのナギ登場。完全に作者の好みと、後スバメ絡みですかね。

これからも大体こんな感じでまったり話が展開していく予定です。もちろん悪の組織も出ますけど。

では、また次回。

Hからの来訪者ノ少年のホントウ（前書き）

たいっへん長らくお待ちいたしました！ようやく最新話投稿です！ついでにちょっと展開を変更したので前回のタイトルが変わっています。

Hからの来訪者／少年のホントウ

「待てええい！あたしの生きる原動力、ドラ もんのとってのどら焼きくらい価値があるピーナッツバターを返しなさい！！」

木々の間を抜けていき、ソラは彼女の大好物・ピーナッツバターをかつさらっていったスバメを追いかける。

道が舗装されていたものから砂利道へと変わっていく。ということ
は、トウカの森に近づいてきているのだろうか。

「……ぜえ……ぜえ……」

……追いつけない。運動神経はいい方なソラが、必死の形相で猛ダ
ツシユを続けても、まったく差が縮まらない。

「……スバツ！」

……時々こちらの様子をつかがうために振り返り、その度になやりと
ほくそ笑むような表情を浮かべるのが、なおさらソラをいら立たせ
ていた。

今回も毎度のごとく彼女の限界を迎えようとしている危ない表情を見てにやにや笑っている。

「……ああ〜！もうむかつくつたら　　ってちよつと！前見て前！」

ソラの焦った声に反応し、スバメが前方に視線を戻すと。

目と鼻の先に鳥ポケモンが向かってくる姿が。

「スバアツ！？」

驚いたスバメはあわてて体を傾け、辛くも衝突を避けたものの。

「危ないっ！」

ソラの叫びも虚しく、スバメはその拍子に近くの大木に勢いよく突っ込んでしまう。バキバキという枝が折れる音が不気味に響き、ソラは顔を青くする。

「あの勢いで飛び込んだじゃった……怪我したら大変だ。早く探さ

ないと
「

と、彼女がスバメが突っ込んだ大木に急いで駆け寄ろうとしたとき。

ガッ

「えっ……？」

右足が、石につまずいた。当然、勢いそのままに彼女の体は前に出て

ゴチーン！（頭が木にぶつかった音）

「なるほど。それで君が連れてきたスバメは体中傷だらけで、

君の額は大きく腫れているのか」

「あはは……そういうわけ」

戻ってきたと思ったらものすごいたんこぶを作っていたソラの話
を聞いて、Nは納得したようにうなずく。

「とりあえず、あなたとそのスバメの手当てをしないとね。N君、
救急箱とかあるかな」

「ああ、それならボクのバッグの中に」

「……ところでナオト。ひとつ聞きたいんだけど」

「なんだい」

ソラの言葉にNが反応する。彼女は息をたっぷりと吸い込んで

「その人ヒワマキジムのジムリーダーナギさんだよねどうしてこ
こにいるのとかなんてナオトはナギさんと普通に話してるのナ
ギさんだよあのナギさんあたし大ファンなんだよねえねえねえ！」

「…お、落ち着いて話してくれ」

Nの服の襟元を掴んでぶんぶん振りながらものすごい剣幕で捲し立てるソラに、さすがのNもたじろぐのだった。

「じゃあ改めて自己紹介を。私はナギ。ヒワマキジムでジムリーダーをさせてもらっています。N君のゾロアークが気になって声をかけたんだけど…」

「…あ、あたしはソラって言います！あ、その、あたしジムリーダーの人たちはもちろんみんな尊敬してるんですけど、特にナギさんは別格なんです！サインください…あいたっ」

互いに自己紹介をして、ソラは続けてサインをもらおうとするのだが、その瞬間痛みを感じたのか額を押さえる。

「まあ、それだけ腫れていれば痛みもするだろう。消毒をしたら、その後はその額を冷やそう」

そう言うと、Nはバッグの中の救急箱をおもむろに取り出す。

「さ、じゃあ私はスバメの手当てをしようかな。ソラちゃん、サインはまた後でね」

ナギもNに続いて動こうとするのだが。

「あ、あのっ。……スバメの手当、あたしにやらせてくれませんか」

ソラの頼みに思わず足を止める。

「でも、ソラちゃんは自分の怪我が……」

「ナギさんは鳥ポケモン使いなんだろう。彼女に任せた方が……」

「それはそうだけど……でも」

ナギとNの言葉を聞いてもソラは引き下がらない。

「スバメが怪我したのは、あたしのせいでもあるし……ちゃんと責任を取りたいんです！そりゃあ、ナギさんにやっってもらった方がいいのはわかってるけど……手当の仕方を教えてもらえればちゃんとで

きますから!」

柔らかいタオルの上に寝させているスバメに目を馳せながら、ソラは懸命に頼み込む。その表情はかなり真剣なものだ。

少なくとも、怪我をしているポケモンのことを任せてもいいほどには。

「わかったわ。やり方を教えるから、頑張つてね?」

「…っ!ありがとうございます!ってあいたっ…」

「ほら、その前に消毒だ。少し染みるけどね」

何の前触れもなくNがソラの額に消毒液をたっぷりつけたガーゼをピタッとつける。

「痛ああああっ!?!予告なし!?!?」

不意を突いて襲ってきた激痛に、ソラは絶叫せずにはいらなかった。

その日の夜。

「本当にいいんですか？ナギさんみたいな偉い人があたし達と一緒に野宿だなんて」

「別に偉くもなんともないよ。それに、スバメの様子も気になるしね」

焚き火がばちばちと音を立てている中、ソラとナギは話している。スバメの看病を通して会話を重ねたおかげで、今はソラも地に足をつけてナギと話せる状態だ。

「ところで、どうしてナオト君と旅をしているの？」

ソラが言っているのを聞いて、ナギもNのことを『ナオト』と呼ぶことにしていた。ちなみに当の本人は現在用を足しに行っている。

「それはですね……………ということがありまして」

「そういうことなの。彼、やっぱりポケモンバトル強いのね」

ソラの話聞いて、ナギはうんうんとうなずいている。

「やっぱり？どういふことですか？」

妙に納得したその表情に、ソラは疑問を覚える。

「ジムリーダーって職業柄、いろんなトレーナーと出会うの。だから今となっては、一目見たら大体そのトレーナーがどのくらい強いかっていうのが雰囲気わかるようになったんだけどね」

ナギはそこまで言うと、一旦言葉を切り、少し間を置いてから続きを言う。

「彼…ナオト君は、多分そんじょそこらにいるトレーナーとはレベルが違うわ。彼の持つ雰囲気や、今日見せてもらったゾロアークの鍛えられ方を見て、ちょっと身震いしちゃったもの」

「そ、そんなにですか……？あたしも、すごい強いとは思ってたんですけど………」

尊敬するジムリーダーが認めるNというトレーナーに、改めて凄みを感じるソラ。この前のバトルではおそらく本気は出していないだろうし、もし彼が全力で戦ったら一体どうなるのだろうか。

と、その時話題の人物が戻ってきて、この話はおしまいということになった。

「それじゃあ、そろそろ寝ましようか。念のため、みんなが交代で起きてスバメの様子を見ることにしましょう」

「あ、スバメの看病はあたしが徹夜で見るから大丈夫です！」

ナギの提案に、またもソラが自分がやると主張する。

「でも………」

「ちゃんと起きられますよ。いざって時にはアチャモに『ひのこ』をしてもらってでも目を覚ましますから」

「……その作戦だとアチャモも徹夜することになるんだが」

さりげなく入るNのツッコミも気にせず、ソラはやる気満々なようだ。

「とにかく、2人はゆっくり休んでいいから！」

2時間後。

「……………」

寝袋に入ったままいまだ寝ていない人間がここにひとり Nだ。ソラに気づかれないよう、こっそりと彼女とスバメの様子をうかがっているのだ。

つんつん

寝袋を突かれるのを感じて振り返ると。

「まだ起きてるの？何て言うか、優しいんだね、ナオト君は」

こちらも今の今まで起きていたらしいナギが、隣の寝袋から声をかけてきた。

「…その言葉、そっくりそのまま返しましょうか」

「あ、それもそうか」

一本取られたな、というような顔をするナギだが、直後昔を思い出すような表情に変わる。

「……私、小さい頃は体が弱くて、なかなか外に出られなかったの。そんなとき、テレビで見る鳥ポケモン達の姿を見て、いつも『ああ、私もいつか元気に空を飛びたいな』って思ってた。……そういうことがあって、今は鳥ポケモン大好きな飛行タイプのジムを任されているんだ」

Nは静かにナギの話を聞いている。

「だから、鳥ポケモンのことはすごく気になるの。……でも、あなたは鳥ポケモンが特別好きってわけじゃないでしょう？だとしたら、ソラちゃんを気にしているにしても、スバメを気にしているにしても、やっぱりあなたは優しいってことになると思うけどな」

そう小声で言っつて、ナギは悪戯っぽく微笑む。

だが、Nははつきりと首を横に振る。

「それは…きつと間違っている。ボクは自分が優しいなどとは思ったことがない」

「そうかな？私、人の本質を見抜くのが上手だってよく言われるんだけどな」

笑顔を崩さないナギに対し、Nはそれ以上何も言葉を返さなかった。

Hからの来訪者／少年のホントウ（後書き）

というわけで、いかがだったでしょうか。ナギのキャラちげーだろ！と言いたい方、たくさんいらっしやると思われます。……ですが、書いてるうちにいつのまにかこうなってしまうていたんです。許してください。これからキャラ変わる人物が出るかもしれませんね……極力ないようにしますが。

感想や評価などあれば、お気軽にお寄せください。
では、また次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0679o/>

ポケットモンスターBW Nafter ~ 限りなく黒に近い白の青年 ~

2011年10月6日06時17分発行